様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１９６

研究課題名（和文）英語学習者における動詞の分類に関する誤りの分析と明示的指導による効果

研究課題名（英文）The analyses of L2 English learners' errors on verb classification and effects of explicit instruction

研究代表者
近藤　隆子（Kondo, Takako）

静岡県立大学・国際関係学部・助教

研究者番号：６０４４８７０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二言語としての英語の動詞の習得を「自他交替可能有無」という観点から考察し、動詞の構造上の誤りは、明示的な指導により習得され得る問題と考え、その成果を大学の英語教育に応用することを目的として、実証的に検証した。具体的には、自動詞、他動詞、自他交替可能動詞について、大学生を対象に、体系的な明示的指導を行い、その効果について調査した。その結果、動詞の分類、また、学習者によく見られる誤りにおいて、明示的に指導することの効果が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated the L2 acquisition of English verbs by Japanese learners, focusing on the possibility of transitivity alternation, and the effects of explicit instruction on verb structures. The purpose of the study was to apply the results to university English education, considering that explicit instruction on verb structures could be effective for university learners. Specifically, we provided explicit instruction on English verb structures (intransitive, transitive and alternting verbs) to Japanese learners of English at the university level and examined the effects of the instruction. The results show that explicit instruction on verb classification and learners' errors can be effective.

研究分野：第二言語習得論

キーワード：第二言語習得　明示的指導の効果　英語の動詞習得　受動態過剰般化　誤り訂正　教科書分析　主語の有生性　動詞の完結性

１．研究開始当初の背景

第二言語習得研究において、「過剰般化エラー」という問題が長年にわたり多くの研究者によって議論されてきた。過剰般化エラーとは、言語習得の過程において、第二言語学習者が目標言語のある規則を、その規則の適用範囲外にまで当てはめてしまうことである。この過剰般化エラーは、動詞の習得過程でも見られることが先行研究で明らかになっている。

まず、動詞を構造から大まかに分類すると、自動詞、他動詞、自他交替可能動詞に分けることができる。動詞を適切に使うためには、それぞれの動詞が、自動詞構造、他動詞構造のどちらをとるのか、または、自他交替可能なのかを理解する必要があり、英語を第二言語とする学習者にとって困難な問題と思われる。実際、動詞の構造に関する英語学習者による誤りとして多くの先行研究で取り上げられているのが、自動詞の過剰な受動態化（Hirakawa 1995, 2003; Oshita 1997, 2000; Yip 1995; Zobl 1989）、自動詞の過剰な使役構造化（Hirakawa 1995, 2003; Montrul 2000; Oshita 1997, 2000; Zobl 1989）などがある。

先行研究の多くは、自動詞の習得における誤りに焦点を当てている。しかし、英語学習者の誤りには、他動詞に関するものも少なくない。具体的には、英語学習者が、本来、他動詞構造しか持たない動詞に、自動詞または自他交替可能動詞の規則を当てはめている。したがって、英語学習者にとって、自動詞、自他交替可能動詞だけではなく、他動詞の習得も容易ではないといえる。

しかし、学校の英語教育において、動詞の構造に関する体系的な説明はほとんどされていない。また、されていたとしても、実際には、英語学習者の自動詞、他動詞、自他交替可能動詞の概念の理解は非常に曖昧であり、これらの動詞の区別はあまり意識されていない。しかし、動詞の構造、すなわち、動詞と主語・目的語の関係を理解することは、文レベルにおいて最も基本である。これより、本研究では、英語学習者の動詞の構造に関する誤りを明らかにした上で、どのような明示的指導が必要であるかを調査し、学校の英語教育での文法指導の一部として、体系的な動詞の説明の必要性を提言したい。

２．研究の目的

本研究では、まず、第二言語学習者による動詞に関する誤りに焦点を当てた先行研究の分析を行う。動詞の中でも、特に、自動詞の誤りに関する先行研究は数多く報告されているが、誤りの原因に関しては様々な説が提唱されている。したがって、本研究は、これらの先行研究を見直し、英語学習者の誤りを整理することにより、どのような動詞でどのような誤りが見られるのかを検証する。そして、英語学習者が、自動詞、他動詞、自他交替可能動詞をどのように理解しているのかを明らかにするための実験を行う。実験分析では、自動詞（非対格動詞、非能格動詞）、他動詞、自他交替可能動詞という大きな括りではなく、指導に応用できるよう、具体的にどのような動詞で学習者が問題があるのかまで検証する。

上記の実験結果をもとに、大学生を対象に、英語の動詞の分類に関して、明示的な指導を行い、短期的、長期的にどのような効果がみられるのかを調査する。その際、被験者の英語習熟度、教員による指導内容が効果にどのような影響を与えるのかについても合わせて調査する。

したがって、本研究の目的は、文の核といえる動詞の第二言語学習者による誤りを分析し、英語教育における明示的指導の必要性を提案することにある。これまで動詞の習得に関して、多くの研究がなされてきたが、習得の有無の調査や誤りの分析はされていても、その結果をいかに英語教育に生かしていくか、また、どのような指導が効果的であるか、そして、長期的にみたときに明示的指導が習得に繋がるのか、ということに関しては検証されていない。この点において、英語学習者にとって習得が容易ではない動詞への明示的指導による理解の促進、そして、習得に繋がるかどうかの研究は重要である。

３．研究の方法

本研究では、まず、英語の動詞を自他交替可能性という観点から、自動詞、他動詞、自他交替可能動詞の３種類に分類した上で、日本語を母語とする大学生レベルの英語学習者によるこれらの動詞の構造に関する誤りを検証する。実験では、文法性判断タスク、穴埋め式タスク、インタビュー形式の調査を実施する。

実験後、英語学習者の誤りの傾向、原因を分析し、同じ被験者に対して、明示的な動詞の説明を数回に分けて行う。説明を受けてもらった後で、再び文法性判断タスク、穴埋め式タスクを実施する。テストは、説明の後すぐと、１ヶ月以上たってからの 2 回行い、短期的、長期的な効果を調べる。短期的、長期的な効果の分析から、動詞の習得に有効な指導方法をまとめ、学会発表や論文の形で研究成果を発信する。

４．研究成果

(1) 非対格動詞と非能格動詞の習得に関する先行研究の検証を行い、非対格動詞の受動態過剰般化は、動詞が持つ完結性の程度によるものなのか、それとも、統語構造によるものなのか、文法性判断タスクを用いて調査し、統語構造に起因する傾向がみられた。その一方で、統語構造だけでは説明のつかない、非対格動詞間の文法性容認度のばらつきがみられた。

(2) したがって、他の要因についても調べる

ため、中学・高校の英語教科書における非対格動詞の出現回数と大学生英語学習者によるそれらの動詞の誤りの相関関係を調べた。その結果、両者の間に相関関係はなかった。したがって、教科書の出現頻度は、英語学習者の誤りとは関係がないことが示された。
(3) 次に、非対格動詞の主語の有生性の観点から誤りを検証した結果、無生物の名詞が主語のときの方が、有生物の名詞が主語のときよりも、受動態が容認される傾向にあることがわかった。つまり、主語の有生性が英語学習者の自動詞への受動態過剰般化に影響を与えていることが示された。
(4) 上記の結果を踏まえて、自動詞、他動詞、自他交替可能動詞について、大学生を対象に、体系的な明示的文法指導を行い、その効果について調べたところ、動詞の分類、主語の有生性、また、学習者によく見られる誤りにおいて、長期的な効果がみられた。
(4) さらに、wh 疑問文における動詞と主語の関係、主語の有生性の影響について、英語学習者を対象に文法性判断タスク、発話タスクをおこない、その結果を検証した。

まとめると、第二言語学習者による動詞の過剰般化エラーは、動詞の統語構造だけではなく、主語の有生性に起因することが明らかになった。そして、大学生レベルの英語学習者が対象であれば、明示的指導により正しい構造の理解が促されると示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

(1) Shirahata, T., Suda, K., Kondo, T., Yokota, H. and Ogawa, M. (2017). “The interaction of animacy with the wh-extraction by Japanese learners of English.” *Proceedings of PacSLRF2016*.
(2) Shirahata, T., Mochizuki, K., Suda, K., Yokota, H., Kondo, T., Tamura, T. and Otaki, A. (2017) “The acquisition of English aspects in achievement verbs by Japanese learners of English.” *Bulletin of the center for educational research and teacher development Shizuoka University*, *26*, 201-210.
(3) Kondo, T., Otaki, A., Suda, K. and Shirahata, T. (2016). “Occurrences of Unaccusative Verbs in English Textbooks and their Acquisition.” *Journal of the Chubu English Language Education Society, 45*. 53-60.
(4) Kondo, T. and Shirahata, T. (2015). “The effects of explicit instruction on intransitive verb structures in L2 English classrooms.” *Annual Review of English Language Education in Japan* (ARELE), 26, 93-108.
(5) Kondo, T. and Shirahata, T. (2015). “A study of explicit instructions on transitive and intransitive verb structures: Focused on the method of explicit instruction.” *Journal of the Chubu English Language Education Society, 44*. 57-64.
(6) Shirahata, T. and Kondo, T. (2015). “‘*Takako happened the traffic accident’ is more erroneously accepted than ‘*Mami fell the snow from the roof.’” 『第 4 回教科開発学研究会発表論文集』pp.17-22. 愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻.
(7) Kondo, T. (2014). “Errors in the usage of transitive verbs in second language acquisition: overpassivization of intransitive structure.” *Journal of the Chubu English Language Education Society, 43*. 65-72.

〔学会発表〕（計 15 件）

(1) Shirahata, T., Kondo, T., Suda, K. and Yokota, H. (2016). “The Effect of Explicit Instruction and Error Correction on Learners’ Grammatical Accuracy.” The Seventh CLS International Conference (CLaSIC). National University of Singapore, Singapore (oral presentation)
(2) Yokota, H., Kondo, T., Shirahata, T. and Suda, K. (2016). “The Acquisition of English Aspects in Achievement Verbs by Japanese Learners of English.” The Seventh CLS International Conference (CLaSIC). National University of Singapore, Singapore (oral presentation)
(3) Shirahata, T., Mochizuki, K., Suda, K., Yokota, H. and Kondo, T. (2016). “The acquisition of English aspects in achievement verbs by Japanese learners of English.” The 35th Second Language Research Forum (SLRF 2016), Teachers College, Columbia University, USA (oral presentation)
(4) Tamura, T., Shirahata, T., Suda, K., Yokota, H. and Kondo, T. (2016). “The effects of explicit instruction on derivational suffixes for Japanese adult L2 learners of English.” The 35th Second Language Research Forum (SLRF 2016), Teachers College, Columbia University, USA (oral presentation)
(5) Shirahata, T., Suda, K., Kondo, T., Yokota, H., Ogawa, M. and Ogawa, S. (2016). “The Interaction of Animacy with the Wh-Extraction by Japanese Learners of English.” Pacific Second Language Research Forum 2016 (PacSLRF2016), Chuo University, Tokyo (oral presentation)
(6) Yokota, H., Shirahata, T., Suda, K. and Kondo, T. (2016). “Acquisition of probes for short-distance Wh-questions by Japanese learners of English.” The European Second Language Association (EuroSLA) 26, University of Jyväskylä, Finland (oral presentation)
(7) Kondo, T., Suda, K., Shirahata, T. and Otaki, A. (2016). “The importance of teaching unaccusative verbs to English learners.” II International Conference on Teaching Grammar 2016, University of Valencia, Spain (oral

presentation)
(8) Shirahata, T., Kondo, T., Suda, K. and Yokota, H. (2016). “The effect of explicit instruction and error correction on learners’ grammatical accuracy.” II International Conference on Teaching Grammar 2016, University of Valencia, Spain (oral presentation)
(9) Kondo, T., Otaki, A., Suda, K. and Shirahata, T. (2015). “Animate and Inanimate Contrast in the Acquisition of Unaccusative Verbs.” The Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS) 2015, Beppu, Japan (oral presentation)
(10) Kondo, T., Otaki, A., Suda, K. and Shirahata, T. (2015). “Japanese learners’ usage of *be* + *-en* forms with English unaccusative verbs.” The Japan Second Language Association Annual Conference (J-SLA) 2015, Hiroshima University, Japan (oral presentation)
(11) Kondo, T. and Shirahata, T. (2014). “Explicit Instruction on English Verb Structures in L2 Classrooms.” The Sixth CLS International Conference (CLaSIC), National University of Singapore, Singapore (oral presentation)
(12) Kondo, T. and Shirahata, T. (2014). “The Effects of Explicit Instruction on Transitive and Intransitive Verb Structures in L2 English Classrooms.” Japan Society of English Language Education 2014, Tokushima University, Japan (oral presentation)
(13) Kondo, T. (2014). “The wrong usage of *be*+*-en* forms with intransitive verbs in L2 English by Japanese learners.” The Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS) 2014, Bunkyo University, Japan (poster)
(14) Kondo, T. and Shirahata, T. (2014). “A study of explicit instructions on transitive and intransitive verb structures: Focused on the method of explicit instruction.” The Chubu English Language Education Society 2014, Yamanashi University, Japan (oral presentation)
(15) Kondo, T. (2014). “Overgeneralization of *be* + *-en* forms with intransitive verbs in L2 English.” The Japan Second Language Association Annual Conference (J-SLA) 2014, Kwansei Gakuin University, Japan (poster)

６．研究組織

(1)研究代表者

近藤　隆子（KONDO, Takako）
静岡県立大学・国際関係学部・助教
研究者番号：60448701